知と心と地域を結ぶ● Iwate Prefectural University ――― 岩手県立大学広報紙

IPU·32

イズムの継承

卒業研究で忙しい12月の、とある日。「僕らの志も、みんなの協力で培われた成果も、後輩たちが引き継ぎます。これからはOBとして応援する立場です」（看護学生会の初代代表・秋山龍太さん）。

2004年1月に誕生した同会は新入生歓迎会・大学祭・スポーツ大会などの機会を通して、たくさんの心と心を結んできました。

世代が変わり、2006年9月から代表を務めるのは鎌田佳恵（かまだ・よしえ）さん。

仲間と一緒に、学年の隔てのない環境づくりが進みます。また、看護を勉強する学生の交流ネットワークは学外へも広がりそうです。さまざまな思いを胸に、たしかな前進は続きます。

看護学生会の新旧メンバー

左から／
秋山　龍太さん（4年生・初代代表）、
そして波柴　佳美さん（総務部長）、
鎌田　美希さん（財政部長）、
鎌田　佳恵さん（現代表）…いずれも2年生

思いに応える思い

それぞれの学部に在籍する留学生へ、マンツーマンで対応します。指導を受ける留学生は、全員が中国の出身です。その中には、国際交流協定締結校である大連交通大学からの特別聴講学生4名（ソフトウェア情報学部）が含まれています。

チューターは、留学生の希望や指導教員からのアドバイスに沿って活動計画を立てます。チュータリングの目安は週に1回、2時間ほど。そして、実施した内容を月ごとに報告します。日本の言葉・文化・習慣、さらに社会の様子を教える場面などを通し、チューター自身が国際感覚を養っていくメリットも期待されます。

留学生へのチューター制度

日本人とのコミュニケーション、学業や日常生活に関することなど。さまざまな面で外国人留学生をサポートする「チューター」へ委嘱状が交付されました（12月14日）。

このほどチューターを務めることになった四大生・大学院生は延べ7名。

《いわて5大学共同シンポジウム》開催のお知らせ

岩手で高等教育を担う5大学の学長が一堂に会し、これからの地域連携で果たす役割について、さまざまな角度から意見を交わします。

- ●と　き／平成19年2月3日（土）13:00～15:50
- ●ところ／ホテルメトロポリタン盛岡 NEW WING 盛岡市盛岡駅前北通2-27
- ●申し込み・参加料は不要です。
- ■テーマ／未来の地域連携に果たす大学の役割
- ■話題提供／本学学長・谷口 誠
- ■パネルディスカッション
  コーディネーター
  岩手大学監事・中原 祥皓氏
  パネラー
  岩手大学学長・平山 健一氏
  岩手医科大学学長・佐藤 俊一氏
  富士大学学長・小山田 了三氏
  盛岡大学学長・園井 英秀氏
  本学学長・谷口 誠

リエゾン　LIAISON

昨年12月、ボランティアを求める地域とボランティアを希望する学生とを結びつけるための「ボランティア情報サイト」が、本学社会福祉学部のホームページ（HP）に開設されました。小学校でのラーニングサポーター、ケアホームや一人暮らしのお年寄り宅での雪かき、高齢者のはなし相手など、既に多くのボランティア募集情報が掲載されています。このHPが“Liaison”となり、地域と本学学生との連携がより一層深まるものと期待しています。（HPアドレス：http://www-welf.iwate-pu.ac.jp/2005/volunteer/）

（小野寺）

IPUカレンダー

2月

- 9日●後期授業終了
- 10日～11日●大学院第2次募集選抜試験
- 16日●大学院第2次募集合格発表
- 20日●一般選抜入学試験［宮古短期大学部］
- 25日～26日●一般選抜入学試験・前期日程［四大］
- 27日●一般選抜入学試験 合格発表［宮古短期大学部］

3月

- 8日●一般選抜入学試験・前期日程合格発表［四大］
- 9日●一般選抜入学試験［盛岡短期大学部］
- 12日～13日●一般選抜入学試験・後期日程［四大］
- 16日●一般選抜入学試験合格発表［盛岡短期大学部］
- 20日●学位記授与式［宮古短期大学部］、一般選抜入学試験・後期日程合格発表［四大］
- 23日●学位記授与式［四大・盛岡短期大学部・大学院］
- 21日～31日●春季休業［宮古短期大学部］
- 24日～31日●春季休業［四大・盛岡短期大学部］

キャンパス彩

剛性に富むボディー。
チェーンが巻かれた太いタイヤ。
テニスコートの奥で見かけた除雪車は、
静かに出番を待っていました。
しんしん積もった雪を押しのけ、
重低音を響かせる働き者です。

あなたの声を

本学の広報紙「IPU」の紙面づくりに参加しませんか。記事に関する感想や意見、投稿、さらに本学への質問など内容も形式も問いません。FAXまたは電子メールで随時、受け付け中です。

IPU·32
発行／2007年1月31日
公立大学法人
岩手県立大学
研究・地域連携室
〒020-0173 岩手県滝沢村滝沢字巣子152-89
TEL／019-694-3330・FAX／019-694-3331
URL／http://www.iwate-pu.ac.jp/ e-mail／info@ml.iwate-pu.ac.jp

何かが生まれる予感

創って楽しむ－PU Festa

深まる秋の週末。「－ism－」をテーマに、9回目の大学祭が催されました（10月28・29日）。参加する人たちが、それぞれの主張や考えを伝え合う。さまざまな－ismを掛け合わせることで、あらたな－ismを生み出す。この二つの意味が未来を指向して掲げられました。

モールに並ぶ模擬店には人だかり。34の出店が食べる楽しさを提供しました。さまざまなジャンルのライブ演奏、学部やサークルが趣向を凝らした展示も盛りだくさん。

こうした中、特別企画として知事講演会・知事との討論会が行われています。「岩手の地域づくり」と題した講演の後、5名の学生と壇上でディスカッションを展開。地域医療の充実、県立大生の地元就職、期待される若者像などを巡って意見が交わされました。

みんなで、ECO－ism－

ゴミの回収・分別、そして食器のリユース（洗って何度も使うこと）を担当したのは環境系の自主ゼミ「Gr－ish」のメンバーと、学生有志。ゴミの計量結果は次の通りです。

●可燃ゴミ／622kg●ペットボトル／21kg●ビン／17kg●カン／23kg●生ゴミ／89kg●割り箸／35kg●発泡スチロールの再資源向け／813kg●発泡スチロールの可燃ゴミ／6・55kg

学長特別賞に輝いた人

一芸の強さだ、社会への貢献だ

学業プラスアルファで何かに秀でた人、学内や学外で社会貢献などの活動に携わっている人…。それぞれの考えや主張や才能に基づいて学生生活を豊かに彩ったり、地域とのつながりを深めたりする学生を称える機会がありました。

平成18年度の「学長特別賞」。その表彰式が12月7日に行われています。谷口誠学長から表彰状、記念の盾を手渡された皆さんは次の通りです［敬称略］。

■社会福祉学部4年・山口奈緒子／平成17年度全日本女子学生囲碁選手権で第4位。

■社会福祉学部・化粧ボランティアサークル「KIPU Labo」／高齢者を対象に化粧やハンドマッサージのボランティア活動を行う。

■社会福祉学部・社会福祉学部「コーラスグループ」／開学以来、入学式および卒業式で学生歌の合唱を担当してきた。

■総合政策学部3年・高橋雄太／自らドイツを訪ねて環境政策を調査、その報告を行うほか多彩な活動で学内を活性化した。

■盛岡短期大学部生活科学科2年・紺野千春／日独スポーツ少年団交流事業に参加するなど、スポーツを通して社会活動の発展と国際交流に貢献している。

大臣表彰、おめでとうございます

総合政策学部　教授
由井　正敏

…平成18年度「野生生物保護功労者」として「環境大臣賞」を受賞。一般鳥類や希少猛禽類の調査・保護・生息に関する手法の確立ほか森林生態系の保全に尽力。

盛岡短期大学部　教授
千葉　俊之

…栄養関係功労者として、平成18年度「厚生労働大臣賞」（栄養士養成功労者）。生活科学科食物栄養学専攻で指導に携わり、多くの人材を輩出してきた。

お楽しみ会でボランティア

どろんこ隊☆in あゆみ保育所

「これから私たちが、皆さんに歌や踊りを、お見せします。お父さん、お母さんと一緒に、いっぱい楽しんでくださいね」

小春日和の11月25日。ボランティア活動の一環として、どろんこ隊☆が保育園児に笑顔を振りまきました。

お楽しみ会を企画したのは、岩手県立中央病院の職員が運営に携わっている「あゆみ保育所」の父母会。その会長を務める齋藤淳智さんが看護学研究科OBという縁もあり、出演決定。当日のメンバーは全員が社会福祉学部の1年生で、保育士めざして勉強を重ねています。

出番を待つ廊下では「大丈夫かな」「しっかりしなきゃ…」と、不安げな表情。けれども100名弱のギャラリーを前にすると、吹っ切れたように堅さが解けて本来の調子を取り戻したようでした。

じゃんけんゲーム。「サンタさんだよ、カエル君」というタイトルの紙芝居。さらに、子どもたちが参加して大いに盛り上がった「アブラハムの子」。次々に繰り出される出し物で会場が湧き、時間の経つのが、とても速く感じられました。

「一人一人が気持ちを込め、息の合ったところを披露できたと思います。全体の演出を工夫するとか、もっともっと表現力を高めるとか、これからへの課題がハッキリ見えた意義も大きいですね」

とどこおりなくリーダー役を務め終えた山田真澄さんが、メンバーの率直な気持ちを表すかのようにコメントを寄せてくれました。

サークルで元気者

●陸上競技部　**楽しく鍛えるアスリート**

心身のコンディションを整えたり、競技力を高めたり。あくまでも自主性を尊重、それぞれのモチベーションと目的に合わせてトレーニングの内容と強度を工夫する自由が尊重されています。

あちこちで催される駅伝大会へエントリー。「走るのが好き」という面々に混じり、砲丸投げに情熱を注ぐタフガイも。

「いろんな人が楽しく集える。そんな雰囲気が自慢です。水曜と土曜が練習日で、冬場のテーマは筋力アップです」と、部長の三浦淳（まこと）さん＝ソフトウェア情報学部3年。

春に向かって有意義なシーズンオフを過ごしています。

仕事場訪問

教育・学生支援室
●学生支援グループ

カウンター越しの笑顔です。

「いろいろな学生と、気心が知れるようになります。高校生らしさが抜け、だんだん大人っぽい話し方、考え方に変わっていく。この窓口を利用してもらうたび、そういう成長ぶりが感じられますね」。こう話す高橋俊博主査ほかメンバーの皆さんは、いつも親身な応対を心がけています。

さまざまな証明書の受付・交付。このほか奨学金・サークル活動・施設使用・アルバイトに関する情報提供などなど…。学生生活の、さまざまな場面を温かい気持ちでサポートするセクション。その仕事柄、気くばり・心くばりが自然な感じで表れます。手続き・届け出の方法といった内容を分かりやすく説明する場面が、しばしば見られます。

第8回 看護学部公開講座

●10月15日／アイーナ

参加したのは、岩手県内の看護職者など。「臨床に携わる皆さんとともに回を重ねてきた成果は、リピーターの熱心な姿からも感じ取れました。今日的かつ関心度の高いテーマを巡り、理解を深めたり意見を交わしたりできました」（山内一史・広報委員会委員長）

『看護学部発信!!地域・臨床と大学とのコラボレーション』がメインテーマです。「公立大学の果たす看護領域における地域連携・地域貢献」と題し、豊田久美子氏（滋賀県立大学人間看護学部教授）が基調講演。未来指向型の看護の構築に向け、相互理解と協働の大切さを語り掛けました。

さらに、小グループに分かれて交流セッション。慢性期看護の事例検討、看護場面検討フォーラム（Web版）の活用、「がん何でも相談」の実際と課題、といったテーマが取り上げられました。

第2回 いわて情報産業シンポジウム

●11月1日／アイーナ

さらなる産学連携の推進、大学発イノベーションの実現。加えて、ビジネスモデルの深化によるマーケット創造と地域貢献。こうした論点で講演やパネル討論が行われ、先進的な成功事例の紹介も盛りだくさん。広域エリアにアンテナを巡らせて産業界との結びつきを強め、本学が技術革新や産業集積をリードする方向性も示されました。

松村滋弥氏（伊藤忠ビジネス戦略研究所・所長）は「基礎研究に始まり知的財産（シーズ）の確立、そして実用化・ビジネス化というプロセスで透徹した戦略スキームが欠かせない」と指摘。マネジメント部門を含め、マンパワーを集積する必要性も強調しました。

立命館大学における産学協働のビジョンとノウハウ、北九州でのIT活用事情もパネラーから紹介されています。

環境保全と体験型観光の推進を考えるシンポジウム inたのはた

●11月18日／ホテル羅賀荘

北三陸の海を望む会場に、自治体関係者ほか地域住民など多くの参加者が集いました。

まず、幸丸政明・総合政策学部長の基調講演。「国立公園の活かし方―陸中海岸国立公園と沿岸地域のより良い関係を求めて―」と題し、フィールドワークに基づくデータを示しながら観光事情、陸中海岸の置かれている状況について言及しました。

人文的な価値をも育む自然と共存する意義を指摘した上で、あらためて「ゆたかさ」の意味を確認する意義を強調。「さまざまな地域資源を組み合わせ、新たな機軸の観光モデル（ブルー&グリーンツーリズム）を立ち上げることで活路が開ける」という見解が示されています。

つづいて、自然環境を活かす体験型観光の可能性を語り合うパネルディスカッション。「なぜエコ観光なのか?」という問題提起に始まり、観光ニーズ・マーケットの多様化、田野畑村のビジター受け入れ態勢、情報発信の留意点とノウハウ、環境保全策の必要性など多面的な意見がさらに交わされ、議論が深まりました。

総政セミナー inアイーナ

●開催後記

総合政策学部では、学びと発見の場を県民の皆さんと幅広く共有・展開することを目指して「総政セミナーinアイーナ」を開催してきました。わが学部らしい多彩な専門分野の魅力に、あるいは教員一人一人の個性や知見に、気軽に接していただく機会です。

10月からの3ヵ月、とても内容に富むプログラムだったと思います。詳しく伝えられないのが残念ですが「体験講座」「公開講座」「読書会」の三つで構成、それぞれ2～3のテーマが盛り込まれています。もちろん無料です。

初めての試みを通し、効果的なPRの必要性など今後への課題も見えました。と同時に、たくさんの成果に恵まれました。一般の公開講座では得られない知識と情報の面白さ、意外な発見の喜び、そして興味の広がり、といった感想が寄せられています。少人数ゆえの、ゼミ的な雰囲気も好評でした。

新たな内容、運営方法を盛り込んで「総政セミナーinアイーナ」を、これからも育みます。より多くの方との充実した時間を心から願っています［実施委員会　代表／倉原　宗孝・談］。

韓国・又松大学校との絆

学生交流に始まり、ひろがる機会

昨年9月1日、韓国の又松（ウソン）大学校【Woosong University】との間で国際交流協定が結ばれました。同大学校は鉄道輸送、デザイン・情報、健康・福祉、観光・経営などの学部を擁する総合大学で、大田広域市にあります。

2003年、日本留学学科と本学の社会福祉学部との交流がスタートしました。これが端緒となり、2006年3月、研修旅行として来日した学生40名が本学を訪問しています。また翌月から、社会福祉学研究科に2名の研究生を受け入れました。さらに同年8月には、韓国語と韓国文化を学ぶプログラムに、本学の4名が参加しています。

引き続き、この春にも新たな動きが見られそうです。現在、数名の特別聴講学生をキャンパスに迎える方向で学生交流のプランが練られています。

国際交流協定の締結校は、又松大学校を含めて6校に。異文化理解に基づく学習機会の広がり、そして学術振興へと期待が寄せられています。

これからの多国間外交、日本の針路

国際講演会ダイジェスト

わが国の国連加盟50周年を記念し、今年度3度目の国際講演会が開催されました（12月9日／講堂）。

『日本と国連―加盟50周年にあたって―』と題して講演したのは、国連大使のキャリアを持つ佐藤行雄氏（財団法人　日本国際問題研究所理事長）。それによると「世界の平和に貢献すべく、集団的安全保障という枠組みの中で国連が示すべき方向性、果たすべき責務が明らかにされなければならない」。こう指摘し、わが国がグローバルな存在感を強めるための明るい兆しの一つとして、国際機関で働きたいと志す若い世代の存在を挙げました。

また「国連憲章の精神を、どう現実社会で具現化するか」と根源的な論点を提起。さまざまな問題への対応力が高まるよう国連は改革されるべき」という一点に意見は集約されました。

基調となったのは、多国間外交の舞台に立って佐藤氏が得た数々の経験です。「常任理事国への道のりは長いが、わが国の立場に理解を示して協調する国々は多い。しばらくは理想と現実との間で、情勢の推移を注視していく必要があるだろう」と結びました。

続いて、谷口誠学長との対談は『アジアの安全保障と日本の役割』というテーマ。食糧やエネルギーの分野も含め、複眼的かつ安定感のある国際的なリレーションを構築する必然性が語られました。また「これからのアジア太平洋地域に向け、対アメリカの姿勢でも日本はスタンスとオピニオンを明らかに」という見解を佐藤氏は示しています。

留学生サロン

陳（ちん）　浩（こう）

社会福祉学部福祉経営学科／1年

●中国　遼寧省　瀋陽より来日

「にんげん」への興味に導かれ

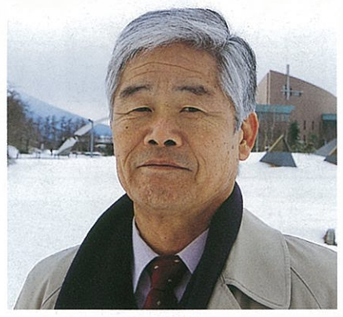
2年間、都内の大学で環境系の化学を勉強しました。そこを辞めて岩手に来たのは「にんげん」という存在への関心が高まったから。社会保障や心理学その他、福祉に関する実践の学を修めたい気持ちが高まっています。

「大学院へ進む。ゆくゆくは研究者として自立する。そういう夢に前進しています。年金や医療制度の充実、地域コミュニティーの創造、というように高齢者の暮らしを支える多様なシステムの整備は、私の国でも大きな課題の一つです。日本の状況を通して、問題解決の糸口が見つかるかもしれません」

友だちが増え、都会とは大違いの自然が身近で、すっかり和食党になった、と近況を語る陳さんの好きな日本語は「がんばって」。その語感は、どんどん湧き出す"元気"のイメージだからです。

「風のモント」に寄せて

副学長　古澤　眞作



あの調べとの出会い

ことし4月、まだ雪の残る岩手山を見ながら岩手県立大学に着任した。そんな私の初仕事となった入学式の会場で、学生歌「風のモント」を聴いた。

心の内奥に満ちてくる調べを、この大学へ来る前にも聴いたことがある。しかし、これから大学運営に携わっていく立場の人間として改めて、一つ一つの歌詞に込められた意味をイメージしながら耳を傾けてみたのだ。

作詞・作曲を手がけた、あんべ光俊氏の思いとは何であろうか。むろん、皆さんの思いも様々だと思う。この場を借りて私なりに感じ、考えることを少し書いてみることにした。

イーハトーブの風

私は2年前までの3年間、花巻に住んでいた。その間、様々な機会に宮澤賢治の世界と触れることができた。あの賢治が名づけた「イーハトーブ」は、ドリームランドとしての日本もしくは岩手県の表象であり、そこでは、あらゆることが可能である。いうなれば「すべての人の夢が実現するる理想郷」としての岩手県が描かれていた。

理想郷といえば、私たちにとっては遠い世界、まさに夢のような世界だと受け止められがちである。しかし私の意見は、そうではない。イーハトーブは、もっともっと身近で手の届く世界である。すなわち、私たちが実現しようとする志や願いが、やがて叶えられてゆく広々としたフィールドであると信じている。

私たちは誰でも「こうしたい」「こうあれば良い」と志向することを抱いている。

たとえば、道にゴミが落ちていれば「このゴミがなければ」と仮定したり、ゴミのない美しい光景を想像したりする。そのようにして心の中に現れるのが、イーハトーブの端緒である。けれどもイーハトーブは、そのままでは実現しえない。誰かが、すなわち意志をもった人自身が、ゴミを取り除かなければ実体は伴わないことになる。

私たちは、いろいろな夢を持っている。それらを実現して形にする主体は、人間が持つ意思の力に他ならない。さまざまな価値観や方法論を伴って表出されるエネルギーは、私たち自身、ひいては社会が前進していくために不可欠である。私なりに呼ばせてもらうなら、そのような意識や行動の総体（アンサンブル）が「イーハトーブの風」である。

世界は、そこに在る

イーハトーブの風は透き通っている。それが何かを動かすことによって、私たちは風の存在を感じ取る。と同時に、視覚的な具体性も確かめられる。夢を形にする行為を通してのみ、風が運んできたものをリアルに認識できるのだ。

風のない世界は、よどみ、変化がなく、沈滞し、朽ちた世界となる。

イーハトーブの風は、まさに変革する力である。夢を形にする力、生き生きとした世界を実現する力とも置き換えられるだろう。すべての人が風になり、それぞれの夢に向かって力を発揮すれば、イーハトーブが生まれる。

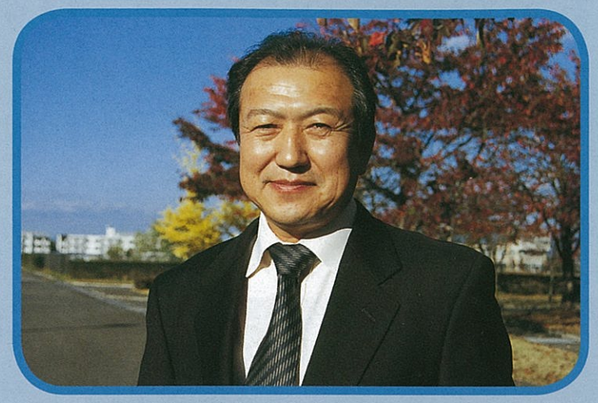
学生諸君が「風のモント」として、この理想郷である岩手県から広い世界へと飛び出し、賢治が求めた〝世界全体の幸福〟のために活躍することを願ってやまない。

風になれ
草原の緑に燃える胸に
新しい夢の翼
広げながら走れ明日へ

岩手県立大学学生歌
風のモント
［作詞・作曲／あんべ光俊］

公共財としての針路は、どこへ？

独立行政法人 科学技術振興機構
JSTサテライト岩手
技術参事 兼 科学技術コーディネータ
藤澤　久一



必然の動機と目的、テーマの新しさを語れるか否か。

そもそも「学」のチカラは、独創性や革新性と一体であるべきです。あまたの成果が広く深く社会へ還元され、さまざまな花を咲かせていくことに、私は心から期待します。

いずれの分野でも、探究心をくすぐる魅力的なテーマが放つ求心力に惹き付けられ、自律したマインドと頭脳が結集するものです。現場を預かる教員の皆さん、そして学生諸君は日々、ワククワする未来指向のテーマと向き合っているでしょうか。この場合のテーマとは、広義において教育・研究の対象全般を指しています。

どのようなアプローチを経て展開を図るのか。あるいは、どんな点に有用性・普遍性（実学としての社会的な価値）を見出したいのか。「学」に臨む感性や構想力を発揮すれば、めざすべき方向と着地点は、おのずと定まるはずです。新しい風を吹かそうと、主体的な取り組みに邁進するスピリットの発露を注視したいと思います。

ボーダーレスに指向して、地域社会での揺るぎない存在感を。

第一義的に果たされるべきIPUの使命、いわば大学としての生命線は、人間性・基礎分野・専門性に関わるクオリティーの高い教育をトータルに体現することに尽きると思われます。だからこそ自己実現への道を歩む学生一人一人と、真剣に向き合ってください。そんな日常と諸研究との相互連関を強め、社会構造のイノベーションに寄与し得る大学であり続けることを望みます。

時代を彩る知の営みの数々。これらの成果は国内レベルにとどまらず、ワールドワイドに還元されるのが望ましい。時には地域という枠を飛び越え、ボーダーレスな視座で今日的な課題を捉えたいものです。

IPUで育まれた人材、もしくは成果が国際的な評価を得られるように、という大きなストーリーを描き出す自由も体感していただきたいのです。教育・研究の両面で地域に密着しつつ開放性に富む取り組みが行われるほど、実学を旨とする学風にスケール感が増すような気がします。

マネジメント部門を巻き込んで、熱気の渦となるように。

IPUがめざす地域貢献は〝地域浸透〟と同義である、という説を私は唱えます。たとえば、さまざまな自治体とのリレーションを深める気運の盛り上がりから、新たな活路が拓けそうです。

より良い看護ケアや社会福祉の実践、コミュニティーの高度情報化、そして政策の立案から運用・評価など。それぞれの学部の特徴を活かし、社会分野との接点を幅広く深めてください。また、さらなる知の融合を求め、ジャンルの垣根を超えて学際性を追究する目的意識の先鋭化が必須です。現場の声に応え、公共財であるIPUの価値は高まっていく。このような図式で、オリジナリティーあふれる施策を世に問うてみませんか。

まずはローカルな課題と真正面から向き合って、実効性のある考えや方策を提示する。問題解決に役立つノウハウの蓄積が、オンリーワンの大学を語る裏づけとなるはずです。さらに、多種多様な研究シーズの技術移転やビジネス化、あるいはベンチャー企業の創出を視野に入れるなら、競争原理の働く世界へ打って出る自覚が望まれます。と同時に、外部資金の導入へ向けて研究テーマを高い次元で構築するとともに、予算配分・プロジェクト評価に関わるマネジメント手法を深化させるべきでしょう。

◆

かぎりないポテンシャルの顕在化に関心を寄せ、私は長期的なスパンでIPUの歩みを応援したいと思います。「自分が正しいと確信し、自信を持って物事を進めていますか？」。「また、そのことに対してマメに調べ、謙虚に受け入れ、説明していますか？」。こうした問いを交わしながらイノベーションを興したいものです。

じぶん時間

ピュアな動機を忘れない。

社会福祉学部　福祉経営学科／３年　盛合　理紗

教科書に載ってないこと

学問のトビラを叩く、きっかけ。それを与えてくれたのは、父親という存在だった。

新聞記事のスクラップ貼が、たまたまリビングルームに置いてあった。また、なにやら難しそうな専門誌も。行政マンとして介護保険に携わる父親が自宅での勉強にと、あれこれ資料を揃えていたのだった。

あるページの見出しが目に留まり、介護保険制度なる言葉を知った盛合さん。

「今にして思うと、社会福祉学への興味は、家庭での何気ない日常から始まっているということです。断片的でしたが、教科書には載っていない用語や概念を知ることで社会への関心が高まりました」

と同時に「勉強するなら、これだ」と確信した盛合さんは内発的なエネルギーに促され、志望校選びにも迷わなかった。

誰のための福祉なの？

「まだ高校生でしたが、素朴な感想に発して強く認識できたことがあります。それは、福祉という領域を織り成す、いろんな立場の人が存在する厳然たる事実です」

政策を作る人。政策に基づいて現場で働く人。そして、政策の対象となる人。それぞれの立場があり、言い分もあるだろう。だからこそ方向づけ、考え方の集約は難しい。法律や制度の運用を巡ってもベストの答は、なかなか見つからない。そんなふうにマクロ的な理解を深めながら、盛合さんは福祉の可能性に目覚めていった。

「ところが知らず知らずのうち、私は利用者の側に立っていました。けれども視野を狭めたり一面的な理解に走ったりしない、というバランス感覚を父から教わりました」

どの道へ進もうか

「リアリティーを感じていたい」と、盛合さんは言葉を選んだ。どんな知識も理論も、活かすことで値打ちを放つ、という主張である。そのための最善の方法は、人と関わること。コミュニケーションを図って相手を受容、そして利他的な行為を重ねていく。たとえば、ソーシャルワーカーを務めるのも選択肢の一つだろう。

母校（宮古高校）は閉伊川の河口に近く、時々、海の匂いが漂ってきたという。そんな宮古が大好きな盛合さんは、卒業したら地元の役に立てるよう、福祉職としてのUターンを意識し始めているのだ。

こうした一方、福祉観の広がりを求めるとともに福祉教育の実践にも関心を寄せ、教職課程を履修している。所定のカリキュラムを修めると［福祉］の高等学校教諭一種免許状が得られる。しかし、教職を志すかどうか決断するのは、まだ早い。

目的意識を問われます

地域での多様な福祉サービスを実地に即して学ぶ「ソーシャルワーク現場実習」は9月と11月、2週間ずつの日程で行われた。盛合さんの受け入れ先は、宮古市の社会福祉協議会（社協）である。

おすすめ授業

●アツイ言葉が議論の証だ。

［福祉システム専門演習Ⅰ］（３年前期）は少人数のゼミ形式で行われました。能力主義が広まるニッポンの世相を捉え、さまざまな価値基準が社会生活に及ぼす影響や功罪を論じ合う、というものです。狭義の福祉が対象ではなく、どちらかと言うと社会学の色合いが濃い内容でした。自分なりの主張を持って議論へ加わったり、他者の発言を聴いて新たな視点に気づいたり。ちょっと背伸びして語り合う感覚も、大学生の特権なのかもしれません。

まず実習のねらい、具体的な達成課題を自分なりの言葉で表し、教員からの指導を受け、それを基に実習担当者に実習内容を組み立てていただいた。と同時に事前学習も進めた。このような準備を重ねて臨んだ現場では、笑顔と語らいを交えて心と心が結ばれていた。

できる限り、という思い

障害のある人たちが利用するデイサービス、高齢者が利用するデイサービスの場面では対人援助の基本を教わった。また児童館で「いろいろなタイプの子どもたちと出会い、遊びを通して気持ちの通わせ方を会得できたような気がします」と、振り返る盛合さん。

さらに、福祉サービスの実施に向けて利用者の状況を把握するための訪問に同行した。具体的な相談に応えることも大切だが、いかにして信頼関係を築き、その人にとって最善と思われるサービスを提供し、より良い方向へと導くか、という点にも意識が傾いた。また、不安を与えずに自然な会話を進めて必要な情報を引き出したり、発見したりする会話術・観察力・想像力の大切さと難しさを学び取れた。

自分自身とも向き合えるようになり、成長へのきっかけが得られたという点でもソーシャルワーク現場実習の意義は大きい。「できることから着実に行い、足元をきちんと固めて進んでゆこう」と、盛合さんは誓っている。

まだまだ、進まねばならないと誓う今。

看護学部／教授　石井　トク

「ワークショップ、市民公開講座の機会も通じて看護関係者ほか、たくさんの人と視点や問題意識を共有したいですね。それにしても、いくら時間があっても足りない…。ふだんの私は、こんな感じでしょうか」

時に熱く、時に優しい語り口。あふれる思いを言葉やアクションに託す石井先生。その心は、ある一面では来年の7月下旬へ飛んでいます。理事を務める日本看護研究学会の学術集会が盛岡で開催される予定で、その準備が始まっているからです。

あくなき意欲で専門性を究めていくことが使命である、と自認する石井先生は日本助産師会理事の要職にも就いています。「妊婦さんが、お産しやすい環境づくりを地域の課題として進めなければ」という母子保健への意思に導かれ、助産師への道を志した教え子が何人もいます。また、ヒトES細胞の研究と臨床への応用を巡って生命倫理・安全性、そして医事法学の観点から討議を重ねる文部科学省の専門委員会にも参加しています。

「このほか、やらねばならないことが山ほど。さまざまな知見や成果を学部生、大学院生へフィードバックすることは人材育成に有効でしょう。最先端の潮流と呼応して『医療行為とは何か』を問い続け、あるべき姿について広く深い認識が必要、と日々学生たちに説いています。」

いしい　とく
1978年3月、法政大学法学部・法律学科を卒業。博士（医学）。看護師、助産師としての臨床経験も持つ。千葉大学看護学部・同研究科の助教授を経て1996年4月、広島大学へ（医学部保健学科・医学研究科／教授）。1998年の開学から本学教授。母性看護学・医事法学・生命倫理学が専門分野で、医療事故と関連要因、生殖医療と倫理的問題などを対象にテーマを展開。著書は「医療事故―看護の法と倫理の視点から」（医学書院）ほか。

この仕事に一生懸命な場面と、理由。

宮古短期大学部　経営情報学科／助教授　宮沢　俊郎

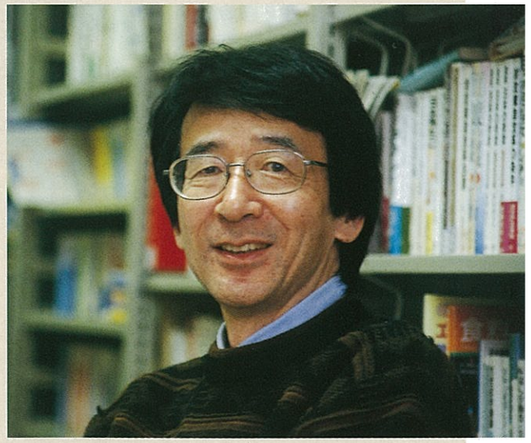
日当たりの良い研究室に、きょうも学生の笑顔と声が絶えません。「究極は週末も含めて24時間、フルオープン」という心意気でWelcome（歓迎）の姿勢を表す宮沢先生が、心を込めて応えています。

社会の仕組み、金融のメカニズムに関して聞きたいことがある。卒業論文を作成するための文献や資料を貸してほしい。あるいは、会社訪問や採用試験に備えて模擬面接を、というケース。さらに、学生生活や進路に関する相談事も持ち込まれます。

「新学期が始まる4月から、8月上旬までの支援記録は320件を超えていました。ある程度の結果を2年間で出さなければならない。そんな状況にある短大生の必死さ、向上心を受け止める毎日です。できるだけ濃密なリレーションを保ちたい。満足度の高い知的刺激、考え方のヒントを提供したい。学生に対する私の意識は、こうした方向へ集約されます」

一人一人の存在や胸の内を認めて自主性に働きかけたり、良い点を伸ばしてあげたりするのが宮沢先生のポリシーです。

「おもしろくて内容が濃い」と評判の授業には、手作り感覚が活かされます。さまざまな質問や意見をランダムに募り、それらへの回答やコメントを作成。一覧できるよう、プリントに整理して配ります。履修者との双方向のコミュニケーションを活発に、という気づかいと工夫の表れです。



みやざわ　としろう
一橋大学大学院社会学研究科・後期博士課程を単位取得退学。社会学修士。芝浦工業大学工学部、一橋大学大学院社会学研究科などを経て1996年4月、宮古短期大学部へ。2002年4月より現職。専門分野は現代日本経済論・経済原論・金融論。資本の概念、市場経済と日本経済、高齢化と日本経済といった視座に基づいて社会システムと経済との結びつきを捉えるとともに、財政赤字累積・格差拡大の側面にも着目。経済理論学会、東北経済学会に所属。

食育で、子どもたちと向き合う毎日。

盛岡市立河北小学校　栄養士
花田　里実さん
盛岡短期大学部　生活科学科
食物栄養学専攻［平成16年3月卒］

食べ盛りの子どもたち、教職員の分を合わせて210食ほどを1日に用意します。学校栄養士として3年目の花田さん。おいしくて栄養のある給食を楽しく食べてもらおうと、献立づくりや調理にと、大活躍の毎日です。

すでに7時半ごろ、厨房で作業がスタートしています。二人の調理スタッフと息の合った仕事ぶり。打ち合わせ内容に沿って材料の仕込み、調理作業をテキパキ進め、出来上がったメニューは児童が教室へ運びます。

ランチタイムの校内放送では食材の特徴やレシピ、栄養価に関するマメ知識を給食委員会のメンバーが読み上げてくれます。食育の観点に立ち、ぜひ知ってもらいたい点を分かりやすく整理しておくのが仕事の一部と言えそうです。

「教室を回って私から、じかに説明する機会も大切にしています。食べ物のありがたさ、しっかり食べることの大切さ、好き嫌いをなくすことの意義を、子どもたちとのコミュニケーションを通して伝える役目を強く感じています」

さらに食材の手配、栄養計算、カロリー計算、給食だよりの作成、食べ残し傾向のチェックなど花田さんは、一人で何役も担っています。事務室のデスクには、学生時代から愛用する食品成分表が置いてありました。

勉強の日々を振り返ると、調理学に給食管理実習というように、現場のシチュエーションを想定した科目が特に役立っているとのこと。月例で盛岡市の学校栄養士が集う研究会では「食育指導」をテーマに、地元産の食材を活かす献立など、より魅力的な学校給食への理解を深めている花田さんです。

グラフィックが好きで、今がある。

山口北州印刷㈱　製造管理部
竹田　裕樹さん
宮古短期大学部　経営情報学科
［平成17年3月卒］

「情報科学の分野を専攻していた私は、とくにコンピュータグラフィックスを一生懸命に勉強しました。兄貴分のように身近な存在で、良き師でもあった大志田憲先生の分かりやすい授業が、とても印象に残っています」

竹田さんは絵画やイラスト、グラフィックデザインなど視覚的な表現へ強い関心を寄せる学生でした。学園祭のPRポスターをデザインしたのは、忘れられない思い出となりました。やがて進路を決める時期を迎えて「得意なこと、興味を活かせる仕事に就きたい」という気持ちが高まったのは、ごく自然な流れと言えるでしょう。かくして初志を貫き、盛岡で新しい生活が始まりました。

ポスター、パンフレット、チラシ、ページもの…。デジタル化されたシステムが整い、さまざまなメディアが完成品としての形を整えていく印刷会社が就職先です。営業担当者から記録媒体を預かり、竹田さんは細部に至るまでデータの保存状態をチェックして印刷適性を確かめていきます。文字に写真、色の出具合、さらにページの流れや体裁にと、人間の眼を行き届かせるのです。

ソフトウェアの知識とスキルが社会人になって活かされています。学生会で役員を務めた経験は連絡・報告・相談という、職場での基本マナーの下地となりました。

「クオリティーに直結するので、緊張する時間帯が続きます。また工場での印刷工程が控えているので、できるだけ効率的に、とペース配分にも気を配ります。毎日が勉強の繰り返し…。この気持ちを持ち続けたいですね」